

JAPANESE

ルナの出産—私の妹が生まれた日

わたしの名前はリサです。4才です。ハンブルグの近くの村に、家族と一緒に住んでいます。わたしがわかりますか？ わたしはベッドの中でお母さんに抱いてもらっています。

お父さんとローリーはもう朝ごはんを作っています。ローリーはわたしのおばさんです。彼女は手伝いをするために家に来てくれています。お母さんのおなかには赤ちゃんがいます。お母さんのおなかはとっても大きいです。赤ちゃんは春に生まれてきますよ、とお母さんとお父さんはいっています。今は春です！ すいせんの花がもう咲いていますよ！

お母さんは裸になって洗面所にいます。ときどきわたしはお母さんのおなかの中でどんなふうに赤ちゃんが動くのかさわってみます。赤ちゃんはかなり強くけったりします。わたしがそうするように。

朝ごはんのとき、お母さんは全く食べませんでした。蜂蜜つきのパンさえも。おなかが固くなっているとお母さんが言いました。すると「まもなくお産が始まることに賭けるわ」とお父さんにいいました。ローリーとわたしは「ばんざーい、赤ちゃんが今日生まれるよ！」と叫びました。「それでは、もっと強くなるかどうか見て、待って見ましょう。もしかしたら本当の陣痛ではないかもしれないからね」

お父さんとわたしはサーカスごっこをして遊びました。あぶないやり方で曲芸をしてもお母さんは全く見ていません。

おばさんはわたしと多くの時間を過ごしました。太陽はかがやき、ローリーはわたしとファビオと遊んでいます。ファビオは私の友達です。彼も4才です。わたしたちは砂場で囲いを作って木製の動物で遊ぶのが大好きです。わたしは3つ、ファビオは5つもっています。彼はロバの赤ちゃんをもっています。

わたしが砂を入れる新しいカップを取りにいったとき、静かにしなければなりません。お母さんが玄関で、カレンと電話をしていました。カレンはわたしたちの助産婦です。

わたしがちょっと着飾っているとちょうど、カレンの赤い車を見つけました。「みて！」とファビオが言いました。「ルナのうちの助産婦さんがやってきたよ」今日、彼女は大きなカラフルなかばんを持っていました。カレンはかっこいいです。彼女は私に青い石をくれたことがあります。ときどき聴診器であそばせてくれたりします。「こんにちは、カレン」わたしたちは彼女に呼びかけました。彼女はちょっと微笑むと、急いで家の中へ入っていきました。

ときどきお母さんがうなって、とても声を高く上げながら呼吸をしているのを耳にしました。「これはまったくふつうのことだよ」とお父さんと助産婦がいいました。わたしはちょっと奇妙に感じていました。ローリーがそばにいてくれてうれしかったです。もちろんファビオもいてくれてうれしかったです。わたしたちは外でお店屋さんごっこをしています。椅子の上にある機械をつかって、赤ちゃんの心臓の音が聞かれます。そしてファックス機のように紙が出てくるんです。

幸運なことにうちには客用のバスルームがあります。お母さんがバスタブで座り、助産婦が背中をマッサージしているから、そっちのバスルームにはいくことができません。暖かいお湯に入ったり、マッサージをすると、陣痛がきている間のお母さんを気持ちよくしてくれます。

お父さんはお母さんのおなかをさすったり、背中をマッサージしたりします。お父さんはできる限り最善を尽くしてお母さんが赤ちゃんを産むお手伝いをします。わたしが生まれたときもお父さんは同じようにしました。それは昔のことでしたが、アルバムにそのときの写真があるのでわたしは知っています。

お母さんがボールによりかかって、おなかがボールから垂れ下がっています。このやり方は、お母さんの背中をリラックスしてくれます。

わたしはこのボールを使ってはずんだりしますが、でも誰かがわたしを抱っこしてくれるときだけです。

ファビオはもうわたしと遊びたくなくなりました。なぜなら彼はいつもわたしの三輪車を使いたいからです。だからわたしはローリーとおうちへ戻りました。

ちょうど赤ちゃんがお母さんのおなかから出てきたいという時でした！

ベッドルームの明りは薄暗く、ちがう匂いがしました。

ヒーターがつけられ、赤ちゃんが生まれてくるのに心地よく、暖められていました。

なんとお母さんは本当に大きな声を出していました。そしてわたしたちは赤ちゃんが「おぎゃー！」と泣く声を聞くことができました。しかしお母さんが赤ちゃんを抱き上げると静かになりました。お母さんとお父さんとローリーはちょっと泣いていました。なぜなら彼らはとっても幸せだからです。カレンでさえ、顔に涙がこぼれていました。喜びの涙、なぜならわたしに妹ができたから。ばんざーい、妹が生まれたあ！

わたしたちは臍の緒を切るのを手伝いました。

カレンはクランプがしっかり止められているか確かめなくてはならないといました。

わたしの小さな妹はメジャーで計られ、体重を計られ、お風呂に入れられて、そしておむつをしました。それからわたしが手伝うことが許されました。わたしはもう大きなお姉さんになったから、じょうずにできます。

カレンは自分の助産婦の道具を片づけています。彼女のかばんにはいっぱい物が入っています。わたしはお医者さんのかばんを持っていますが、それはもっと小さいです。カレンはゴミ袋にいらなくなったものを入れました。

それからわたしたちは小さい妹のために乾杯しました。おとなたちはシャンパンを飲み、わたしは子供用のシャンパンを飲みました。それはまさにミネラルウォーターですが、わたしのコップには大人たちと同じようにいい感じで泡が立ちました。「おめでとう！」みんなで言いました。やっぱりきょうが誕生日となりました。

助産婦が帰るころには、もう暗くなっていました。

お母さんとお父さんとわたしは赤ちゃんから目を離すことができませんでした。

わたしたちは小さなルナを見つけていました。そう、わたしの妹の名前はルナです。

とてもかわいい名前だと思います。お母さんとお父さんが昔からその名前にしようと選んでいました。しかし、それは今まで秘密でした。

ルナはお母さんのおっぱいを飲んで、ぐっすり眠ってます。

わたしはベッドでお母さんとお父さんに抱っこされてます。そしてルナも。

そして明日、わたしはへその緒のようなのを作って、ファビオとお産ごっこをしようと思っています。

あとがき

「ルナの出産」は、操り人形師である UWE Spillmann の初めての子供向けの本です。ものごとは人形を使ってでは表せないものもあります。3人のお父さんである彼は、上の子たちにとってお産がいかに興味深い出来事かをご存知です。

INGA Kamieth はアートセラピストで、一人の女の子の母親です。この物語に素晴らしい絵を提供してくれました。彼女の絵は本を明るく元気にしてくれるし、一方では助産婦に関する情報を提供してくれたり、とりつきやすい本にしてくれています。何よりも彼女の絵は、お産の日を迎える家族が体験するすばらしい感情を十分に描いています。

裏表紙

お母さんのおなかには赤ちゃんがいます。これは4歳のリサにとってとても特別な日のことです。彼女のお母さんは子供を産むのに病院ではなく、自宅で過ごしました。リサは、お母さんとお父さん、そしてカレン（助産婦）、彼女のおばさんのローリー、友達のアビオと一緒に美しい春の日を楽しんでいます。それは赤ちゃんがお母さんのおなかからいよいよ出てくる時のことでした。

お産があたたかいイラストと短い文章で描かれています。

この本はこの素晴らしいお産の日における全登場人物の興奮・喜び・幸福感をあらわしているばかりでなく、助産婦の仕事に関することをも伝えています。

この本によって、妹や弟のお産に立ち会えなかった子どもたちは、物語の中でお産に立会う経験することになるかもしれません。

by E. Shiono
May 24, 2002